

深い理解を促す授業をいかに実現するか ―研究者と実践者の協同に注目して―

高橋 幸太郎（東京大学大学院 教育学研究科 博士課程）

問題・目的

予測困難な社会においては活用可能な知識の習得が重要であり、学校教育ではこれまで以上に「深い理解」の促進が求められる。深い理解とは知識同士の関連付けが伴った理解を表し、用語の定義や因果関係を適切に説明できる理解の状態を指す。しかし、実際の学校現場では、どのように深い理解を促すか、という実用上の点に課題ある。

そこで本研究では、深い理解を促すための手立てとして、「教えて考えさせる授業」に注目する。教えて考えさせる授業とは、深い習得を目指した授業設計論であり、教師からのインプットと子ども自身のアウトプットのバランスを重視する。特に子ども自身のアウトプットには、教師から学んだ知識を子ども自身の言葉で説明させる「理解確認」と、学習内容の応用的活用を促したり子どもの間違いやすい点を尋ねたりする課題に取り組む「理解深化」がある。教えて考えさせる授業は、小・中学校を中心に日本各地の学校で実践され、生徒の深い理解を促す上で有用であることが示されている。

しかしながら、学校現場の教師にとって理解深化の課題を設計することは難しく、教えて考えさせる授業を実装する上での課題と言える。そこで本研究では、研究者と実践者の協同によって、学校現場における教えて考えさせる授業の実現を試みる。具体的には研究代表者（研究者）と協同研究者（実践者）が学習内容や学習上のつまづきを協議した上で理解深化の課題を設計し、これらの課題を取り入れた授業が学習者の深い理解の促進に寄与するか検討する。

2024 年度の実践

本実践は、協同研究者が所属する高等学校 2 校にて実施された。参加者は、協同研究者の講座を受講する高校 2 年生であり、生物基礎の単元「免疫のはたらき」にて介入を行った。研究代表者と協同研究者らで理解深化の課題を検討し、協議のもと設計した課題を協同研究者らの授業にて扱った。介入の効果を検証するために、介入の前後で概念テストを実施した。また、協同研究者らが担当しない講座を参考クラスとして設定し同様の概念テストを実施することで、本実践における効果検証の妥当性を高めるよう努めた。

分析の結果、介入クラスと参考クラスの間にはテスト得点の有意な差は見られなかった（図 1）。この考察のために授業ビデオを確認したところ、理解深化を行った介入クラスで理解確認が実施されていないことが明らかになった。そこで、「深い理解を発露するには理解確認と理解深化を同時に扱う必要がある」と仮説を立て、2025 年度の実践を行った。

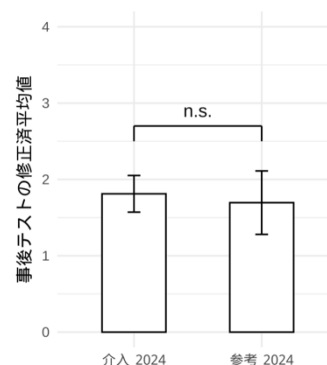


図 1 2024 年度の主な結果

2025 年度の実践

2024 年度で示唆された理解確認の重要性を検証するために、2025 年度の実践を行った。デザインや測定等は 2024 年度の実践と同様とし、介入クラスの当該授業に理解確認を取り入れることを差分とした。

分析の結果、介入クラスと参考クラスの間にはテスト得点の有意な差が見られた（図 2）。この結果から理解深化の効果を最大化するには、その前段階の知識の準備が重要であることが示唆された。つまり、本実践では理解深化の課題設計に対するアプローチを行ったが、それだけでは不十分であり、理解深化を行う準備である理解確認の重要性も示唆された。

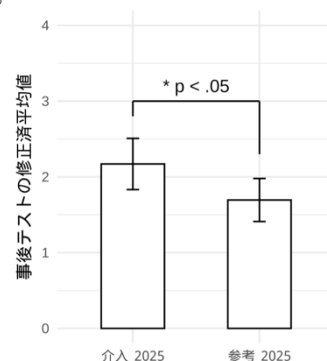


図 2 2025 年度の主な結果

本研究の成果と今後の課題

本研究を通して、授業前半で学習した知識を活用する理解深化は重要である一方、その前段階の理解確認も重要であることが示唆された。このような「深い処理を行う前の知識の準備」に関する議論は、先行研究において管見の限りでは扱われていない。つまり、本研究は実践的価値をもつことはもちろん、学術的価値も併せもつと考えられる。

ただし、研究者と実践者の協同は容易に実施できるものではないため、すべての学校現場で深い理解を促す授業を実現するには更なる検討が必要と言える。また、本研究はあくまでも実践であるため、結果の一般化には十分留意する必要がある。

協同研究者：河合 晃樹（静岡県立高等学校）、鹿野 直人（京都府立高等学校）